

パンドラ

地震はすこしずつ近づいてきたわけじゃない。ほんというところ、この人生ですこしずつやってくるものなんてひとつもない。なにもかも、地震のときと同じ。いきなりね。ちまちまやってるのはあたしたちのほう。

あれは九十九年の何月だったかな。大地が脱臼した、って声がきこえてた。地震活動だとか、大陸の底がすべったっていう人もいた。あたしは、世界の終わりに呼んだ。ありのままにね。裁きの日ってやつ、総告白するまえに教区の教会でやる堅信式の準備で骨の髄まで叩きこまれたんだけど、いつなにかになるのか人間にはわからないけどいつか来るんだって。あたしは時間感覚とは縁がなくて、空気で膨らんだ袋よりふらふらしてたのよってママがよくいつた、ってことはいつそんなことになってもおかしくなかったんだ。

あたしが理解できなかったのは神さまの御心^{みこころ}ってやつで、よりによって真夏に世界の終わりを持ってきたから、あたしたちはちょうどプール用に掘った穴を踏み固めたところで、バルセロさんちの人形の家にあるサラマンダーストープで食事の支度をさせてもらってた。年代

アナ・マリア・デル・リオ⁽¹⁾ 三角明子 訳

ものの建物だったけど昔の人のほうがなんでもうまくやったから、あたしたち全員、いい感じにおさまってた。でもなにより、サンティアゴに住んでるいとこがこれからこちにくるところで、あたしは夜になってもう熱くなっちゃって息もできないくらいだったし、蛇が出てきても夜ひつかいたりいじつたりできないように穿かされたがっちりしたパンツがぐつしより濡れてた。処女には蛇はいないっていわれてたけど。

地震は真夜中に起きたんだけど、あたし以外みんな意識むきだしで眠ってたよね、あたしはイギリス製フランネルのがっちりした上下つなぎのパジャマを着せられてたの、虫の卵がうじゃうじゃする貯水池で水浴びしたとき洗札を受けちゃったのに気づかなくて、それでできた発疹を乾かすためにからだじゅうメンソレータムを塗りたくられてね。

あつという間にドアはみんな吹っ飛んで、壁はオレンジの房みたいにまっぶたつに割れて、ちびたちを脇に抱えて走りまわる子守は紅ひとつさしてない口からみじかいお祈りを機関銃みたいに連射してて、

巻き起こる土煙は混乱した魂みたいだった。

二週間おきに気鬱になるママの世話をするためにいつしよに来てたセニョリータは、ママの臉にティーバッグを載せてあげて円卓のお話をするのが日課だった。首元と袖口にレースがついた服を着てるとちいさなシロサギみたいで、すごい勢いで英語を吐きながら降りてきた。あたしの乳母は昔スペインから伝わった由緒正しいことばに誇りを持って、あの野蛮なことばを死ぬまでけなしてただけど、この時に限っておんなじような一続きの音で返事したもんだから、あたしたちはほんと口を開けたよね。セニョリータは乳母のここに来て手を取って、とにかく感謝してた。

父^{とち}さまは皮ひもを鞭がわりに使って、あたしたちを家の外に追いたてた。

パティオで母^{かあ}さまは指先を恐怖に震わせながら、あたしたちをたどたどしく数えた。七人みんないた。陶器の人形みたいな母さまはフランス製の生地で縁取りされて、ものすごく細い腰には泣きぬれた魂が宿ってた。このだっ広い小麦農場に住むようになってからずっと母さまの魂は泣いてて、この広さを前にすると、単に、なにもいえずに消えちゃった。魅力たっぷりのサンティアゴにいたら市立劇場に通ってパウダールームで化粧直したりお茶を飲みながら心ゆくまで噂話したりできるのに、なんでこんなに離れていなきゃならないのか、訊くこともできない。どうしてエル・トトラルに埋もれてなきゃいけないのか、かけらも理解できずに、太った牝牛が灰色っぽいねばねばしたのを産むとこや、糞の臭いがあるさらに品のない日々が永遠にぼつぼつと落ちていくのを眺めてるだけだった。

父さまがやってきて後ろに立つと、母さまはその陰にすっぱり隠れ

た。母さまの柔和な目は、命令を待ち、カオスをなんとか整える仕事に手をつける準備を整えた。

父さまと母さまのあいだの亀裂は、ほんのちいさなヒビから始まったんだと思う。ある日曜日、もうグレタ・ガルボみたいな浮世離れた美貌にも、遠くを見るようなまなざしにも感動しなくなって、頬のたるみが目に入ったりして、そこから母さまは取るに足りない、軽くうつろいしい所有物になっていったんだろけれど、その頃は父さまには自覚さえなかったはず、だってどんなに証拠があつたって気づくのは簡単なことじゃないもんね。

あの日、母さまはなにも見えてないみたいになにやら指先を動かしながらおねだりを続けた。母さまの魂は、田舎の風に吹かれ、鍵みたいに細い腰から萎^{しお}れたままだった。

でも父さまは天変地異をうまく利用した。玄関先の二本のヤシの樹の下に全員並ばせて、身動きを禁じた。

それから、父さまにひとりずつついて、唯一なんとか崩壊をまぬがれた翼^{よく}に向かった。厩舎に面した、父さまの着替^はえ部屋に。

パジャマの上から、父さまのカウボーイパンツを穿^はかされた。空気はしつこい水みたいに冷えきってた。あたしが渡されたのは、股のところが小麦粉を溶いた糊みたいので濡れてるやつだった。でもあたしはお上^{かみ}にはなにもいわないように躡^{しづ}られてたから、ためらいなく穿いた。

そのときは、麻痺した大地の裂け目からたちのぼる冷たい煙から身を守る以上に大事なことはなかった。でも、やっぱり。弟のカルロスが身のほど知らずに、サイズが合っていないって文句をいいだして、一発目の平手打ちをくらった。カルロスにつられて、ほかのみんなも泣きだした。あたしたちの目に焼きついて離れなくなったのは、傾いた窓

窓から飛びでた絨毯、破裂したコーナーキャビネット、見慣れない土地の、煙まみれの内部の黒い水が滴る不吉な水たまり、ひっくり返った犬たちや猫の死体。乳母があたしたちの目を覆った。すると父さまが、「整列。はみ出すな。人形の家で寝ろ」といった。

ひとりずつ、用心しながら入った。ここはまさにサンティアゴのいとこたちと裸で待ちあわせた場所で、錠前かけて、汗だくで土まみれになって、自分でもよくわからない欲望と笑い声、いとこたちが入れない場所にあたしが隠れると、あの子たちは錠前のおりた扉の向こうで泣いて、いいつけてやるって脅すけどけっさよくできなくて、その間もコオロギが埃だらけの隅っこで揃って歓喜の声を張りあげてたんだ。

父さまは年齢別に場所をあてがっていった。全員入るか、あやしいもんだった。父さまは梁の間に放置されたパンツを何枚も見つけた。でもなにもいわなかった。だれひとり、口をきいてる場合じゃなかった。でもこの頃には割れるような大声が出せるようになってた父さまがその声で命令すると、みんなに安心感を与えることができた。父さまは死ぬまでそんな大声だった。あたしたちはじきに、ぴしっと呼列して――あのとときは、いつでも列になって歩いてたと思う――外に出て、マットレスが引っぱりだされてくるのを待った。働いてたのはペドロで、恐怖ではちきれそうになりながら作業していた。

妹のレベカがしつこく肘でつついてきた。あたしは目もくれなかったけど。なにかもがぐらついているときに、馬鹿話を聞きたくなかった。あたしたちはバジャマの裾をカウボーイパンツにしまい込まれ、日曜日に締める帯で恐怖をくくりつけられてた。レベカはあたしの耳元にぶらさがるみたいにつきまとった。

「ねえ。ねえってば」

マットレスにふたりずつ寝ることになった。レベカといっしょにされたあたしは、あの夏を思いださずにいらなかった。サンティアゴのいとこたちとの申しあわせは、裸で家を抜けだして松の下に行くこと。藁を敷いた小ぶりのマットレスが一枚ある場所だった。あたしはいつでもいとこたちより大胆で、まっばだかで行ったけど、あの子たちはあのボタンつきのみつともないパンツを穿いたまま出て途中で脱いだ。でも松の下に来るやいなや、もう止めようのない嵐があたしたちを包んだ。パパたちは二階で寝てた。開けっ放しの窓から、口喧嘩する声があたしたちにも聞こえることがあった。でも母さまの声は聞こえなかった。

そして今、真夜中に、レベカの打ち明け話があたしの耳に届くことになるわけ。でもあたしは今度ばかりは間違えた。パパが押しつけた強制的な沈黙のなかだと、ちいさな妹が声を潜めていつでも聞こえてしまうんだ。

「うんちしたい。パパー、うんちしたいよ」

だれも動かなかった。父さまは一番大きなマットレスに横たわったまま、妹を黙らせた。そしたらレベカが叫んだ。波乱万丈な人生で、いついかなる時も接舷めがけて身を投げる子。

「パパー！ あたしもう出ちゃう！ 外に出ていい？」

父さまはレベカをめっちゃ罵った。馬鹿娘、出来損ない、愚鈍な漏らし屋、生まれつき間が悪い奴、我慢できないのか？

「うん」レベカが答えた。

出ちゃならん。この馬鹿にもわからせない。まだ揺れてるのがわからないのか？ 黙って、いい加減寝るんだ。

陶器みたいな母さまの柔らかな声が父さまを揺すった。ひどいこと
 いわないであげて、ましてやこんな、なにもかもおほつかない時には。
 だれかが窓を叩いた。ベドロだった。歯ががちがちいて、あのプー
 マが出たときよりひどかった。父さまは貧しい人の考えていることが
 理解できたから、あたしたちに説明してくれた。

「そうか、畑が。ああ、覚えてる、麦を刈り取ったやつだろう、くだ
 らない、いったいどうしたんだ。畑にいったい何が起きたっていうんだ」
 「消えました、カルリートの旦那」とベドロがいった。「ないんです。
 デルミラと子どもたちが探してまわったんですが、見当たらないん
 です」

父さまは黙った。それで、父さまにも魂まで恐れが沁みとおること
 があるんだな、あたしたちと同じ型からできてるんだってあたしは思っ
 た。母さまは真っ白な指でネズミみたいに土を掘ってた。光はないの
 に指が光ってみえた。

突然、臭いがひろがった。ジャンヌ・ダルクみたいに胸のうえで手
 を交差させて横たわったままのレベカを、光輪みたいに臭いが包んだ。
 「やったんだね、恥知らず」とあたしはレベカを揺さぶった。「ズボ
 ンをはいたままでうんこしたの？」

返事はなかった。あたしはまた訊いた。するとひどい悪臭が幅の広
 い波のように広がって、セニョリータのここまで届いた。セニョリータ
 は扇ぐ手振りをしながら、

「まあほんとうに恐ろしいこと、さしつかえなければ少しだけ離れた
 ほうが、くつつきすぎですから……」といった。

パパは汚染の中心から自分を隔てた距離を一気に縮めて、レベカ
 の両腕をつかんで外に投げだし、窓を閉めて背を向けた。手のおい

をかく。地面はまだ小刻みに震えていた。

あたしの乳母はやりたいことをやり通すことに決めてて——とにか
 くですね、ドン・カルロス——その場を出て、三本柱のちいさな回廊
 で眠りたいといった。

「狂った者どもを手前で食い止めるためです」と、問答無用にきっぱ
 りいった。でもあたしは、ロザリオの祈りを落ち着いて唱えるためだっ
 てわかった。三人がけのソファに座らせただけど、じめじめした
 寒さが心配で、あたしたちがそれぞれ肩掛けや毛布、ショール、頭巾
 までかぶせてったもんだから、ターコイズブルーのロザリオを手にし
 た乳母は、どこことなく気難しいほんもののインド象みたいになった。

「悪魔が揺さぶっても、聖母マリアに敵うわけがありません」ていう。
 泣きぬれて夜ふけに戻ってきたレベカはとんでもなく臭かったから、
 インド象こと乳母はすっかり目を覚まし、気力をふりしほって、ぶか
 ぶかで生あたたかいカウボーイパンツを脱がせてなけなしの泥で汚れ
 を落としてやった。マグダラのマリアのポーズをとってた母さまも、
 同じようにされながら、ずっと涙を流してた。

夜の闇のなかで、陶器みたいな母さまが、消えそうな声で問いかけた。
 「カルロス、あれは乱暴すぎたんじゃないかしら。釈明を求められる
 かもしれないわ」

そこでみんな、世界の終わりの話なんだってわかったんだ。

あたしたちはなんとか九十九年までたどり着いてた。もう今年をあ
 まいかおりに包まれた避暑なんてない、マッドレスの夜に、開いた花
 冠を屹立させたものを発見することもないんだ。あたしは条項をひと
 つ思いだした。あたしたちは、手鏡を一つ残らず割ったの。しかもみ
 んな一斉にだったから、大人たちは驚いてた。でもあたしたちはもう

鏡で自分を見る必要なんかなかった、夏になるとくりかえす秘密にみんなにも確信を持っていたから。母さまだけはちいさな手鏡を手元に残して、去っていく美貌に触れようとしてた。

天をひっかく天使のトランペットは、まだ聞こえてなかった。母さまはものすごくおだやかな声で父さまと議論してた。父さまのほうは、沖へと出ていく船のジェスチャーしてた。

「わかったよ。明日な。うん、見つかるまでな」

そして、異様なことが起きた。世界は終わらなかった。夜の帳を破ってまぶしく輝く太陽といっしょに、翌日が存在しはじめた。郵便で使うみたいな黄色の太陽が、夜のじめついた恐怖に終わりを告げた。

パパは馬で、被害を確認してまわることにした。戻ってきたときには顔がこわばってた。そんな顔見たの初めて。

きゆうに大きな船みたいにな不安定になった地面がずっと穏やかに揺れ続けてたから、パパは必ずグループで動くことをあたしたちに約束させた。だれも一ミリも逸れるな、寝床にいろ、トイレに行かなきゃだのなんだのくだらないことをいうな。

あたしたちはまた敷地の真ん中に集められた。そばには大輪のオモダカが群れ咲いてた。

そのとき、ロウみたいにまつしろで、まだ金髪分け目が悲劇的なぐらいきちゃんと整ってた母さまがひとり離れて、小鳥みたいな足取りで廃墟へと歩きだした。

母さまはしゃがみこみ、手をちいさな透明の鉤爪みたいにして、地面を掘りはじめた。あまりに暗くて厳しい顔をしてたから、だれひとり、だれかが自発的になにかしようとすると思わずやめさせてたパパでさえも、止めることはできなかった。レベカがママのそばに近寄った。

生まれつき、命令には耳も貸さない子だったよね。

「なにしてるの、ママ」

「お化粧品と宝石をね」母さまはきっぱり答えた。

そこでやっと父さまは、これは一大事なんだって気づいた。もう、暮らしを支えるものがない。畑はぜんぶなくなつたから、あたしたちは宝石を売ってどうにかするほかないんだ。これは食べ物を買うお金の話だったけど、あのときピンクの涙を流してた母さまは、宝石を身に着けること以外、きつと頭になかったよね。

ペドロが母さまの手伝いをするためにやられた。その後、父さまも手ずから掘りはじめた。

そしたらレベカが裾を引きながらあたしのほうにやってきた。地面の揺れを感じないように、蛇みたいにくねくね歩くようになってた。

「ねえ、見つけちゃったよ」

「犬の死体なら捨てなきゃダメ。チフスになるよ」と、あたしはきっぱりいった。「ペビートだったらお願いだから、羽をむしつたりしないで、セニョリータが見ちゃわないように埋めてあげて」

「ペ・ピー・ト・で・も・犬・で・も・な・い・よ」一音ずつ刻むみたいにレベカがいう。「部屋のマットレスの下にあたしが隠しといた嘘のことだもん」

まじめな顔で、あたしをじっと見た。あたしはかがんで、レベカの額にかかった前髪を間近で見る。その前髪のしたに、恐怖を呼びおこすような確信がいくつも巣くつてた。熱があるみたいでも、悪ふざけするときみたいにいまにも笑いそうになつてたわけでもない。

突然、ちいさな女の子の泣き声が聞こえてきた。あたしはママのほうを見た。真つ黒な手をして地べたに座つてた。乳母がチェック柄の

ハンカチで顔を拭いてあげてる。レベカとあたしは走って行った。母さまは父さまに語りかけてた。

「カルロス、掘っているとおかしなものが出てくるのよ。あの夜がでてきたの。覚えてるかしら、あなたのお誕生日で、お祝いの食事をしてましようってみんなここで待っていたのに、あなたはヘミングウェイ領事の奥さんとクラブの化粧室にいたのよ、覚えてる？ 探していたものの代わりに出てきたのよ」母さまの手には宝石ひとつもない。目をこすって泣きつづけた。

消え失せろ、ってパパが合図した。あたしたちが離れたところから見ると、こんな時にまで母さまが誇らしげにきれいにしていた、草原の女王みたいな長い髪を撫でてる。

でもあたしはもう、底まで掘りつくしたいって好奇心の虜になっていた。

キッチンあたりを七人みんなで掘ることにして、そっちへ行った。がれきの間から赤い土がのぞいた。

「キッチンにあった色つきの土だな。それ以外ありえないよ」弟がいった。『科学をあなたの手に』を定期購読してたんだよね。

「続けよう」とあたしはいった。

ベドロがあたしたちの肩に手を置いて、旦那さまがこつちに来る、見つかったらいけません、パティオに戻って、輪でいっぱい太陽のしたで並んだほうが、ってせつついた。

でも、なにもあたしたちを止めることはできなかった。それどころか、どこよりも暗い隅っこで、廃墟の裂け目のまんなかを掘りつづけた。

耳をつんざくような、父さまの酔っ払いがでてきた。セニョリータの寝巻に手を突っこもうとしたあの夜。母さまの金色の忍耐とあたし

が英語で書いた日記のなかに、永遠に葬りさられていたものだった。

馬に乗った母さまの疾走も出てきた。ほぼ裸で、馬には馬具もついてなくて。新年に父さまとひどい諍いいさかをしたあのことだった。

あたしの初潮は試食用の赤い果物みたいに現れ、サンティアゴのいとこの口を汚した。すごい目でこつちを見ると、あたしの脚の間で気を失ったんだよね。そこで全部おしまいになった。あたしはその瞬間からいここに親しい口をきくようになったし、ベッドルームに置くどこかい鏡を注文したの。

あのころ、母さまは週に二回サンティアゴ大聖堂に告解に行ってて、そのあとはパウラでパブリカチンのサンドイッチと、終わりのない涙ながらのお茶。

このあたりになるとあたしは、なにを目当てに探してるのかもよくわかんないまま、とてつもない熱に浮かされたみたいに掘りつづけた。ひとつ下の層にひそんでいたものが出てきてるってことだけは、わかった。ことばの下にあつて、宝石なんかよりずっと大切なものが。紫に暮れてく午後の終わりの数時間、猛々しい太陽が震えるあたしたちを照らしてた。

固いものに当たった。あたしたちは指を集めて端っこから土壌を掻きだす、ほらここにあるよ、下からだよ、離してよ、ここ支えて、押して、そう、気をつけて。

少しずつ、ちいさな白い箱が見えてくる。花が添えてあつて、蓋には十字架が。中にはほんのちっちゃな手つかずの体、赤ちゃんのいい匂いがして、黄ばんだおくるみから両腕が出ていた。

「ママのだ」動じずにレベカがいった。「あたしのつぎに生まれた子、だよ。あのころ、パパはヘミングウェイの奥さんといっしょだった。マ

マはこの子をひっぱりだして、わざと亡くしたの」

「あんたがなんでそんなこと知ってるの」あたしは狂ったみたいにかつとして、レベカを揺さぶった。

レベカは百歳の目をしてあたしを見た。「あんただっておんなじこと、するんじゃないの」

「しないよ」あたしはうなった。力まかせに白い蓋を開める。みんな一瞬で理解した。

どんどん穴が深くなつてく、絶望した指と小指で犬みたいに速く赤土を掘る。箱を置いて何度も土をかぶせた。

「息ができなくなったらーあー」レベカが小声で歌った。

「なにいつてんの。これはあんたのじゃないよ」とあたしはいった。

「誰でもないよね」驚くべき六歳を誇るレベカが答えた。

そのあと出てきたものは、だれにとつてもたいした意味がなかった。弟のカルロスが皿洗いの女の子を初めて見て、驚きのあまり初めて精液を迸らせた時とか。あたしの初めての自慰も出てきた、二月にインフルエンザになったときで、弟のおしゃぶりを使った。カルロスは吐きそうになってたけど大事にはならなかった。だれひとり叫ぶ気力もなかったし、善悪の区別さえつかない状態だった。

夕方にパパが大声でいった。

「全員人形の家へ、腹はきれいにしてズボンもしっかり締めて来い」みんな中に入つてうとうとしてると、あたしの乳母が扉を叩いた。

「ドン・カルロス、開けてくださいまし。掘っていたら何が出てきたと思いますか？」

「奥様の宝石か」父さまは両手を広げて飛びあがった。

懐胎した罪のせいで、あたしたちの背中を恐怖が一筋伝い降りる。

乳母が戸口に姿を現した。

「違います。旦那さま、馬鹿はおよしなさいな。ほんとうに役にたつものですよ。一昨日のパンの入った箱です。ほら」

父さまが切り分けた。落ち着け、といった。この世の終わりでもないんだぞ。

でもあたしたちには、そうなんだってわかった。

註

- (i) チリの作家アナ・マリア・デル・リオ Ana Maria del Rio, 1948-)の短編小説「Pandora」の邦訳である。この作品は底本として使用した短編集 *Siete Dias de la Señora K* (Editorial Seix Barral, Buenos Aires, 1996) に収録され、のちに二十世紀チリ短篇小説の傑作アンソロジー Marx, Camilo (ed.) *Grandes Cuentos Chilenos del Siglo XX* (Random House Mondadori, Santiago de Chile, 2005) にも採られた。